第１７次調査の成果

○奈良時代以降の調査成果

調査区の全体に、弥生時代から古墳時代のたくさんの土器を含む土が広がっていました。土器片の中には奈良時代の須恵器（すえき）も少量含まれていることから、奈良時代以降、たくさんの土器を含む土を使って大規模な土地の造成が行われたと考えられます。

また、調査区の北西端で柱の根本が残る柱穴（はしらあな）を７つ確認しました。

これらのうち３つは東西方向に一列に並んでおり、建物を構成する柱の一部である可能性が考えられます。

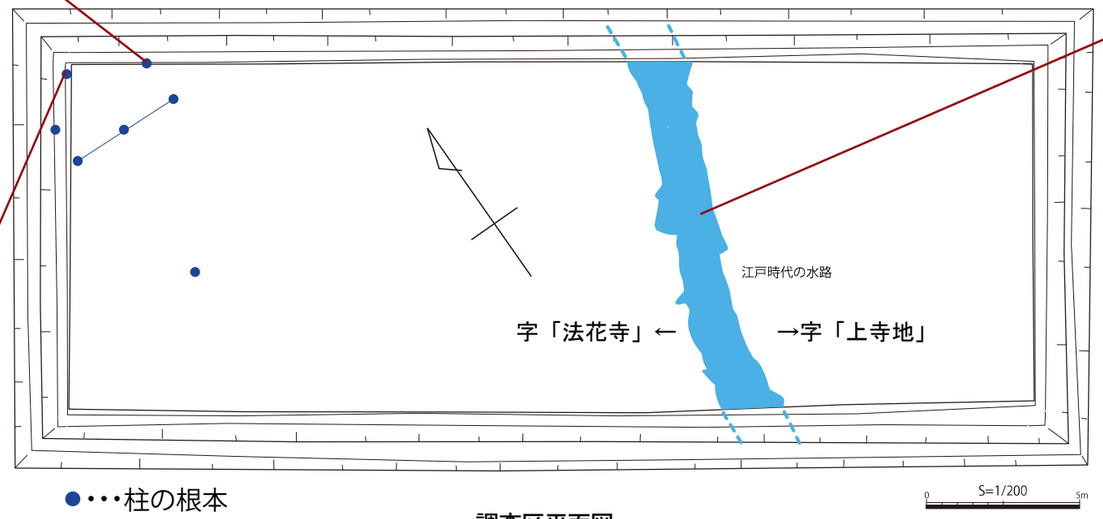
青谷上寺地遺跡では、過去の調査で古代の幹線道路（古代山陰道）と土地区画（条里地割（じょうりちわり））の跡が見つかっています。古代の幹線道路沿いには役所などの重要な施設が建てられていた事例が多いため、今回見つかった柱や造成の跡と道路跡との関係について、今後慎重に検討していきます。

調査区に広がる土器片

調査区全体の様子（北西から撮影）

柱穴の断面と柱の根本

柱の根本がみつかった様子



●・・・柱の根本

調査区平面図

江戸時代の水路（北東から撮影）

○江戸時代以降の調査成果

江戸時代に使われた水路を確認しました。水路を埋めていた土の中からは江戸時代の銭「寛永通宝（かんえいつうほう）」が出土しています。

この水路は江戸時代、鳥取藩が年貢を取り立てる資料として村々の田畑を記した「田畑地続全図（でんぱたじつづきぜんず）」に描かれた水路と位置が一致しています。水路は地名「字（あざ）」の境界となっており、水路をはさんで西側の字は「法花寺（ほっけじ）（※）」、東側の字は遺跡名の一部となっている「上寺地（かみじち）」です（現在の境界はほ場整備の影響で調査区のやや西側に移動しています）。開発等で失われることの多い江戸時代の土地区画を、発掘調査と絵図面の両方で確認することができた貴重な調査例となりました。　※現在の表記は「法華寺」です。

【出土遺物】

○古代（奈良時代頃）

・土　　器：須恵器（すえき）

○弥生時代～古墳時代（調査区四周の排水溝から出土）

・土　　器：弥生土器（やよいどき）、土師器（はじき）、須恵器（すえき）

・金属製品：銅鏃（どうぞく）

・玉　　類：勾玉（まがたま）、管玉（くだたま）、小玉（こだま）、ガラス加工途中品など